

青山同窓會報

《発行所》

青山同窓会

〒951-8127 新潟市関屋下川原町 2-635

新潟県立新潟高等学校内

TEL 025-266-5268

FAX 025-266-5268

《編集・発行人》

長谷川 義明

《印刷所》

オリオン印刷株式会社

〒950-0963 新潟市南出来島1-19-1

TEL 025-283-2151

FAX 025-283-3804

新年のご挨拶

青山同窓会会長

長谷川 義明 (61回)



青山同窓会会員の皆様 新年明けましておめでとう御座います。

昨年は新年会をはじめ、総会、学術文化講演会など同窓会行事に多くの会員の皆様のご参加を頂きまことに有難うございました。各界でご活躍の皆様が一堂に会する同窓会の行事は考えようによっては大変貴重な人生における出会いの場であり、また先輩、後輩からそれぞれに多くを学ぶことの出来る貴

重な機会でもあります。実際昨年の学術文化講演会でご講演を頂いた佐藤幸治氏(64回卒京都大学名誉教授)による「憲法」と「国のかたち」と題する講演は、憲法改正問題が論議される状況になってきた現在において、憲法の意義、役割をいかに考えるべきかについて大変わかりやすく示唆にとんだお話を頂

くことが出来ましたし、田中純夫氏(75回卒新潟市自治振興課長)による「カカサイジモンカ(6138米)登頂談」は未踏峰のヒマヤラヤの高山への挑戦の記録で、山男たちの周到な準備と果敢な挑戦に感銘を受けた次第です。

昨年は新潟市が大合併を果たして人口八十一万という大都市となった年でありました。幾多

の課題があつた中で、篠田昭市長(75回卒)をはじめとする関係者の皆さんのたゆまぬご努力の結果としてめでたく誕生したものであり、そのご努力に深く敬意を表すると共にこれからの政令指定都市に向けた一段のご努力とご精進を期待するところであります。

衆議院解散に伴う総選挙におきましても新潟一区から出馬した吉田六左衛門氏(66回卒)が見事に復活を果たされましたし、新潟二区から出馬した鷺尾英一郎氏(103回卒)が見事に初挑戦、初当選を果たされました。党派は異なりますがご両人の国会の場での活躍を期待するものであります。

また昭和二十三年度より新潟高校に設置されてきた通信制課程が平成十七年度の卒業生をもって五十八年の歴史を閉じることになり、母校正面緑地に「百里流れて」と題する記念石碑を設置するなど閉課程記念事業が行われました。約四千九百人の

青山同窓会新年会のお知らせ

青山同窓会会長 長谷川義明

明けましておめでとうございます。恒例の青山同窓会の新年会を開催いたします。

今年は、多くの方々とお話をする機会を・・・との趣旨から余興は設けませんでした。普段会えない方々と大いに歓談して頂きたいと存じます。

開催要領は下記のとおりです。各期幹事の皆様からも連絡をしていただきますが、参加を希望される方は事務局までご一報ください。

青山同窓会事務局：電話／FAX 025-266-5268

e-mail : niigata_aoyama@yahoo.co.jp

記

日時：平成17年2月17日(金)

受付 午後6時 開宴 午後6時30分～

会場：新潟グランドホテル TEL 025-228-6111

会費：6,000円

卒業生を送り出してありますが同窓会員としてこれからも各地域、各分野での活躍をお願い申し上げます。

昨年も東京青山同窓会、関西青山同窓会が盛会裏に開催されましたが、加えて昨年は新しく仙台に東北青山同窓会が発足し、総会が開催されました。各地で活躍される青山同窓生のお姿を拝見することは大変心強い限りです。

今年も同窓会として新年会、

総会、学術文化講演会などが開催されますが会員各位の多数のご参加を期待申し上げます。同窓会行事に参加することによって多くの先輩、後輩など同窓生から得るもの非常に大きなものがあります。今後とも有意義な同窓会活動であり続けるよう工夫をしてまいりたいと存じます。

このたび同窓会幹事長としてご活躍をいただいております小崎弘一氏より社業繁多によ

り幹事長辞任と後任のご推薦があり、ご相談の結果新しく富山修一氏(75回卒)に幹事長をお願いすることとなりました。富山氏にはご多忙の身にもかかわらずお引き受けいただきましたことに感謝申し上げますと共に何卒会員の皆様からも新幹事長へのご協力を賜りますようお願い申し上げます。

新年が会員の皆様にとって幸多き年でありますようご祈念申し上げます。

校歌、校章への思い

衆議院議員 吉田 六左工門 (66回)



青山同窓会の皆様、新年明けましておめでとうございます。

旧年中は一方ならぬお世話になりました。本年も相変わりがみせすよろしく願います。

私の書架には学校創立一〇周年を記念して発刊された分厚い同窓会名簿が置いてあり仕事柄よく利用させていただいておりますが、その前段に旧制新潟中学校校歌と並んで新潟高等学校校歌が載っております。

一番の冒頭に「百里流れて信濃川 悠々海に入るところ」の歌詞があります。一昨年の中越大地震の直後、萬代橋の上に立ち黄濁した水がまさに日本海に注ぐ光景を目の当たりにした折、「山や緑や棚田のおかげで私達の住む新潟市のような下流都市部の生活が成り立っている」という固い信念のもと、浪

人中の身ではありませんでしたがこれまで培ってきた中央とのパイプを生かし政府、関係省庁に対し早期復旧復興に奔走しました。その中のお一人に同窓の誼もあり国交省佐藤信秋技監（現事務次官）（74回）に大変お世話になりました。

また、二番目に「松葉かたどる校章の凛々しく強き旗のもと」の歌詞があります。「意志、伝統、理想、叡知」を示した校章に閑屋中学校生の頃あれ、昭和三十年入学を許された際は黒の詰め襟の学生服につけた校章を大変誇らしげに思い、

風呂の中で外に聞こえるほど大声で歌った記憶がございます。同窓の集まりを除けばなかなか校歌を歌う機会はないと思いますが、趣味のトレッキングの折にはなぜか校歌が口をついて出て来ます。そして、スクールカラーであるエビ茶の地色は私が諸行事のために揃えたハッピにも活かしております。

今、菊の紋章の議員バッジを再び胸につけていただき、初当選の時にいただいた恩師渡辺秀英先生の「国会、得、青山、旗」の書に思いを馳せ、この直径一、五センチほどのバッジのすみずみに多くの方々の付託が積み重なっている責任の重さをしっかりと噛み締め頑張らなければならぬという強い思いで一杯でございます。

新年のご挨拶

衆議院議員 鷺尾 英一郎 (103回)



あけましておめでとうございます。

昨年は、「郵政解散」に続く総選挙があり、皆様には大変お世話になりました。有り難うございます。私事ではありますが、お蔭様で当選の榮譽に浴すること

ができ、衆議院議員として日々努めさせて頂いている次第でございます。

さて、早いもので初登院から三ヶ月余りが経ちました。今回の選挙、特別国会ほど、マスコミに政治が取り上げられたことはなかったと思います。有権者の方々に政治が少しでも身近になるのはすばらしいと思います。ただ小生は、ともすればワイドショー化してしまうマスコミのネタにならないように、地味だが本当に国民生活に大切なことに取り組んで参りました。

具体的には、財政金融委員会、そして災害対策特別委員会に所属し、主に銀行代理店の問題、公認会計士の問題、そして昨年の山古志村を視察し、改めて震災の予防や震災後のフォローの重要性を再認識した次第です。新潟県にとつてこれらは最重要課題であり、引き続き取り組みたいと思います。

今後は、これらの深化も図りつつ、特に「財政問題」、「教育問題」、「家族、家庭、コミュニティの復活」に取り組んで参る所存です。財政問題は、財政赤字の解消もさることながら、その一因でもある特別会計の問題、そして税制問題等です。教

新年のあいさつ

新潟市長 篠田 昭 (75回)



育問題は、いわゆる「ゆとり教育」後の教育、つまり真の意味で人物を育てる教育です。そして、家族、家庭、コミュニティの復活は、本来日本人が大切にしていた、しかし昨今の合理主義や利便主義により忘れ去られようとしている価値観の復活です。これら三つの問題は、今後の日本の更なる発展の礎となる重要課題であり、早急な改革、ルネッサンスが求められます。

先般話題をさらった郵政問題の比ではない、国の根幹に関わる問題ですので、小生のライフワークにしていきたいと思っております。

最後に、これらの諸課題は、同窓の諸先輩の皆様のご支持なくしては取り組みえない問題です。小生は未だ38歳、若輩者です。今後は皆様のお知恵をお借りしつつ、この新潟県の発展、そして日本の発展に尽くして参りたいと思います。本年も何卒、皆様のご指導・鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。

のご協力の賜物と深く感謝しております。

昨年の合併に先立ち二〇〇一年に合併した黒埼を加えると新潟市は十五市町村が一緒になったわけですが、これは全国で行われた「平成の大合併」の中で最大の数字です。また、新潟市にお仲間になっていた編入合併方式で三十万人も市民が増えたことは全国に例がありません。

これほどの大合併が成就した最大の理由は「本州日本海側で初の政令指定都市をつくらう」との強い思いがあったためと認

識しております。これからは目指す政令市を2007年4月に間違いなく船出させられるよう全力を挙げることが私の責務と考え、お示しした「新・新潟市合併マニフェスト」の方向に沿って、新潟市政の質の向上に努めてまいります。

合併マニフェストでは目指す政令市の基本方向として①世界と共に育つ日本海政令市②大地と共に育つ田園型政令市③地域と共に育つ分権型政令市―の3本柱を明示いたしました。私どもは、これまでの政令市とは違うタイプの、かつてない

政令市を目指しています。

新潟政令市は高次の都市機能、躍動感、わくわく感がありながら、田園の持つ多面的機能、ゆつたり感、快適感を味わえる都市づくりが新潟の目標です。

また、まちづくりで市民の皆さまが主導的役割を果たせるよう、積極的な情報開示と市民参画に努めてまいりますので、今年もよろしくご助言・ご指導をお願いいたします。

平成十七年度 青山同窓会総会

昨年七月十五日(金)、青山同窓会総会がホテル新潟を会場に開催されました。出席者六百九名、例年より若干少ないとはいえ、他校の同窓会とは比べようもない人数の多さであります。

総会では、長谷川会長の議長の元、会計等の議事が進行しました。役員改選の年でありましたが、全員満場一致大きな賛成の声で役員の留任が認められま

した。総会はいつものように楽しく進み、「ますらお」で締め解散しました。

総会を開催する前(五月)に、各期の幹事に集まってもらい、前売り券・ポスターを配布する会が開かれます。昨年までは「越路会館」でしたが、会館が営業を昨年までで終了したため、今年は違う場所での開催になりま

青山同窓会幹事長退任挨拶

小崎 弘一 (73回)



このたび同窓会幹事長を退任いたしました。短い間でしたがお世話になりました。紙面をお借りしてお礼申し上げます。精

力的な長谷川会長の補佐役としては非力でありましたが、新年会の充実、新しい企画としての、青山学術文化講演会の実施等、私なりに努力したつもりではあります。幹事長の職は二年交代くらいで、若い方に引き継ぐのが良いと判断して、会長に退任のお願いをいたしました。新年からの富山修一さんの活躍に期待します。

幹事長就任ご挨拶

富山 修一 (75回)



新年明けましておめでとうございます。この度、73回卒の小崎弘一さんの後を引き継いで幹事長の指名を受けました75回の

富山修一です。伝統ある青山同窓会に多くの方々から参加して頂けるよう微力ながら頑張りたいと思っています。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

東京青山同窓会

栄冠は74回

島津 孝 (84回)

今年の東京青山同窓会総会は、参加者百二十名と昨年の五割増しの大盛況の中、柳通(105回)学年幹事の司会で幕を開け、栗林会長の挨拶、日下部事務局長の会務報告、佐藤会計幹事の会計報告、来賓の長谷川同窓会長の挨拶と続き、吉原教頭先生の報告で第一部総会が終了。

例年だと、幹事会が趣向を凝らしたアトラクションが有るのだが今年は無し、これは偶数月第二火曜の会等で出た、歓談の

時間が足りない！料理を食べる時間がほしい！との声を受け、幹事会で熟慮した結果であり決して手を抜いた訳では無い。ゲストを呼んだのアトラクションに代わるイベントはしっかりと用意されていた。

担当の佐野(83回)学年幹事、星野紹英(84回)学年幹事が四苦八苦している中、司会が小橋川(107回)学年幹事にバトンタッチされ第二部に移る。山根元会計幹事の開会の辞、斉藤



名誉会長の乾杯の音頭で懇親会が始まった。

多少時間の余裕が有ったせい、あちらこちらで歓談の輪ができて飲み物も食事も例年より進みが早かったようだ。

頃合を見計らい、各学年の参加者を競うコンテスト”青山ダービー”の結果発表！栄えある一位は十一人参加の74回が受賞、二位、三位は一位と同人数ながら年齢順でそれぞれ111回と113回が受賞、四位、五位は同じく参加九人の59回と61回、六位に参加八人の64回、奨励賞はここ数年

参加者の無かった90回及び92回の四人が受賞。受賞学年は代表が酒、米、柿の種等の商品を受け取り全員壇上上がり、拍手を受けての記念撮影と大いに盛り上がった。イベント終了のはずだったが、集計後の追加出席者がいたため、結果発表の時点で十人参加している75回に賞がないのはおかしいとクレームがつき急遽、特別賞を授与することになった。

このハプニングで更に盛り上がり会場は拍手と興奮の渦に包まれていった。

その授賞式の余韻も覚めやらぬうちに、これは例年通りの校



歌斉唱へと進む、不肖私が旧制中学校校歌の音頭をとり、駒形(109回)学年幹事が新制校歌の音頭をとる。星野紹英(84回)学年幹事が新人113回を壇上に上げ応援歌「丈夫」へと雪崩れ込む。壇上から音頭を執ると、皆さん本当に楽しそうに歌っているのが良く判る。これだけ世代の違う人間がひとつの歌を一緒に歌うたえるのは同窓会ならではと思う。

歌が終わると、小林副会長の中締め、池幹事長の閉会の辞で

一次会は終了。

私を含めた誘導役を先頭に二次会会場の「日本海庄や赤坂店」へ、多数の参加者が二部屋に分かれて大いに盛り上がり夜が更けて行くのであります。

関西青山同窓会 開催

十一月二十六日(土)、今年で七回目となる関西青山同窓会が、大坂・梅田の「大阪東急ホテル」にて開催されました。今回は新潟からはせ参じた長谷川会長、石田副会長なども含めて五十七名の出席があり、昨年を上回る盛会となりました。

最初に開会のあいさつに立った佐藤幸治関西青山同窓会会長(64回・京大名誉教授)は、最近の法曹界の動向に加え、皇室典範改正に関する有識者会議における秘話なども披露され、その活躍の幅広さにあらためて出席者一同感服させられました。つづいて、外山照夫さん(60回)の音頭で乾杯をしたあと、さっそく懇談に入りました。



さすがに七回目ともなると卒業期をこえた知己もたくさんできている様子で、立食形式の会場のあちこちにたちまち人の輪ができ、思い出話や近況の交換といった話に花が咲いていました。また、今回は学生の参加も多く、就職活動を控えた三回生などが先輩諸氏から懇切丁寧なアドバイスをいただいている姿もあちこちで見受けられ、これぞ青山の人脈と心強く思わされた次第です。

新潟からの出席者のあいさつに続き、現役大学生の自己紹介、さらには各卒業期からのスピーチと会は滞りなく進み、二時間はあっという間に過ぎてしまいました。最後に新旧の校歌と、就職のために来春関西を離れる予定の藤田雄大さん(110回、立命館大学)の音頭で「丈夫」を斉唱、同じく春から研修医としてスタートを切る富樫庸介さん(108回、京都大学)の発声

でエールを声高らかに唱和しました。来年は会場が未定ながらも、今回と同じ十一月の第四土曜日に開催することを確認し、再会を約してお開きとなりました。その後、それぞれが語り尽くせなかった満腔の思いを互いに話し、聞きあうべく、梅田の町に大挙して繰り出したことは言うまでもありません。



青山同窓会 東北地区総会 開催

すっかり秋も深まった十一月十八日、仙台市の「仙台ホテル」において、「青山同窓会東北地区総会」が四十余名の参加をえて開催されました。青山同窓会ではこれまでに東京と関西が活動を開始して例年秋に総会・懇親会を開いており、是非同窓生も多い東北に新たな集いの場を創りたいと、数年前より準備を重ねたうえ、この日の「東北地区総会」となったものです。

当日は、長谷川会長から初めての東北地区総会へのお祝いをかねた挨拶に続き、今回の総会の発起人代表として倉茂周典さん(61回卒)から、この日にいたるまでの経過が報告されました。同窓会名簿などで東北地方にお住まいの同窓生を調査したところ、約四百人の住所がわかり、当日はその一割にあたる方々が参加していることなど、

これからの発展を予感させるお話しがありました。校内幹事から母校の現況報告のあと、当日参加のなかでは最長老の高木秀夫さん（53回卒）の音頭で乾杯し、懇談に入りました。

厚人さん（73回卒）・倉茂周典さんの叙勲の報告などで、東北地区の意気軒昂なところが示された次第。さらに宴たけなわになつてからは、新潟から持参した「校歌・応援歌集」のプリント



を使い、「丈夫」に「新制校歌」は言わずもがな、掲載されたすべての応援歌・校歌を歌いきるという「快挙」も成し遂げました。加えて、学生には参加費の一部を返還するというセレモニーのおまけもありで、二時間は瞬く間に過ぎてしまいました。



通信制に別れを惜しんで 閉課程式典と 記念碑序幕式

勝島 テル子（通信制19回）

「百里流れて」、校歌の冒頭の一節を刻み込んだ、わが通信制閉課程記念碑の除幕と記念式典が、小春日和の十一月十二日、学校、同窓生、在校生ら三百二十余人が参加して行われた。

同窓会総会に続いて閉課程式典に移り、青山同窓会通信制部

会長の牧野栄策さん（11回卒）が「時の流れとはいえ、閉課程は誠に残念」と惜別の言葉を述べた。

小林崔校長式辞、敦井栄一県教育委員長あいさつに続いて、在校生代表の松井美穂さんが「五十八年の歴史に幕を閉じることは、さみしい限りですが、

伝統ある通信制の最後の卒業生となる誇りを胸に、今後を歩みたい」と述べた。

記念講演では、新潟鉄工所に勤めながら、九年かけて卒業した高橋栄治前同窓会幹事長（八回卒）が「どの学科も新鮮、驚きであった。私にとって通信制は心のふるさと」と思い出を語った。

このあと正面玄関脇に設けられた記念碑の除幕が行われた。記念碑は黒みかげ石製で、台座を含め高さ一メートル余、横一・七メートル。碑文を揮ご

うされた第一回卒で、永年、同窓部会長を務められた田中栄一元新大教授、小林校長、長谷川義明青山同窓会長、牧野部会長、記念講演の高橋さん、在校生代表ら八人の手によって序幕が行われた。「これで私たちの通信制が終りになるのね。」そつと涙ぐむ同窓生もいた。

この間、同窓会各期の代表五人がそれぞれの思い出を語った。栗島からかけつけた本保銀一さん（6回卒）は「当時、船便は一日一往復。一日だけのスクーリングに出席するのに二泊三日もかかった」と当時を振り返った。また「冬の間、暗くなるとランプの灯が灯った」と語る人もいた。

ファイナーレは「丈夫」の大喝唱。万歳三唱。いつまでも通信制に別れを惜しんでいた。

五十八年間の通信制の卒業生は四千八百九十六人。現在の在籍者五百余人のうち実際に授業をうけているものは三百五十人。明春の卒業生は百二十人の予定。およそ五千人の人材を世に送り出した。「通信制の学ぶ魂よ、永遠なれ」というのが私の願いである。

同窓生訪問

青木一男さん(66回)

を訪ねて

長谷部 美也子(93回卒)



青山の卒業生で、第三十二代新潟高等学校校長(平成十年四月〜平成十二年三月)も務められた青木さん、同窓出身の校長先生が就任されたのは、新制になってからは初めてです。新潟高校が火災に遭った当時生徒でいらした青木さんは、校舎といえば「プレハブ」の印象が強いそう…さらに校長先生になられた際も新校舎工事の為、またまた「プレハブ」での毎日を送られました。「最近のプレハブは豪華だな!」と語る珍しい体験談の持ち主でいらっしやいます。

青山の卒業生で、第三十二代新潟高等学校校長(平成十年四月〜平成十二年三月)も務められた青木さん、同窓出身の校長先生が就任されたのは、新制になってからは初めてです。新潟高校が火災に遭った当時生徒でいらした青木さんは、校舎といえば「プレハブ」の印象が強いそう…さらに校長先生になられた際も新校舎工事の為、またまた「プレハブ」での毎日を送られました。「最近のプレハブは豪華だな!」と語る珍しい体験談の持ち主でいらっしやいます。

教育実習が終わった。三週間という実習だったが、本当にあっという間だった。でもそれだけ充実していたのだと思う。だから今の僕の心の中では、ちよつとした満足感と、実習が終わってしまったことに対する寂しさが混じり合っている。不思議な感覚だ。

実習の最初、指導教官の先生から、実習の範囲を教えてもらったときは正直少ないと思っただ。教科書でいうと、たかが四、五ページの範囲を三時間の授業で教えるのだから、その時は結構余裕があるなと思った。ところが、実際授業をしてみると、これがなかなか思った通り

教育実習を終えて

筑波大学 第一学群自然学類四年 岡村 博史(109回)

で生徒の移り変わりを見つめてこられた青木さんならではの。

また、青山同窓会は、年齢を問わず非常に結束が固く、長い歴史の中で培われてきたものの力強さを感じるとおっしゃいます。何事もインターネットで済まされてしまうような時代だからこそ、「フェイスブック」で語り合えるこの同窓会は貴重で重要なのだと再確認させてい

たきました。

最近一番忙しいのは「お孫さんの世話」と笑った青木さん。現在は西堀通り十一番町にある、決定山往生院安養寺のご住職でいらっしやいます。本山での修業もかなりのご苦労でいらしたそうですが、ニッコリ語られる姿に、私まで笑顔にさせられてしまいました。

物であるか生徒に分かつてもらうために積極的にコミュニケーションをとるようにした。授業は生徒と先生の信頼関係でなりたっているのだから、コミュニケーションをとることは重要であると思ったからだ。その他には、生徒がノートを取りやすいように板書を工夫したり、興味を持ってもらうために身近な例を出したりした。

最後に、至らない自分を教育実習生として受け入れてくれた新潟高校の先生方に深く感謝いたします。お世話になりました!!

同期会報告

まだまだ元気 青山六三会

(卒業五十年記念大会)

赤羽 良樹(63回)

十月二十二日、新潟グラランドホテルで卒業五十年記念大会が開かれた。松浪、横山、小黒三先生をお迎えし、総勢五十四名の盛会である。開演前にまず記念写真。会員の和田和男君に毎回大変ご苦労おかけしている。江口律子先生のピアノ伴奏で旧、新校歌を歌い、三先生のスピーチ、乾杯と続く。今回は半数近くが地元外メンバー、そして元マドンナ連がこれでも半数近く八人と多数出席されたので大いに賑やかになった。

腰や膝が具合悪いという人が

増えたので最近椅子テーブル席で設営することが多いが、この方が席を移動しやすく、交流が楽であると好評だ。

宴半ばで、山田豊君が江口先生の伴奏でフルート演奏。グ

ルックの「聖霊の踊り」ビゼーの「アルルの女」組曲中のメヌエットの二曲。柏正平君「相川音頭」「四季の新潟」を歌う。二人共、正規にやっているとの事で「流石が！」と皆感嘆し、盛り上がった。最後は皆で上れば怖くない」と女性軍八人全員がステージへ上がり下さってお開きとなる。来年は「古稀の会」で会おうの声も出た。



その後久し振りの新潟情緒に親しむ二次会も有志により設営され、きれいだころの踊りを観、柏君が本格的に歌って気分最高。又翌日は小林俊雄君のお世話でゴルフ会も開かれたが、生憎の雷雨となつて途中打ち切りとなつて残念であつた。皆様お疲れ様でした。

青山68会

卒業45周年記念パーティー

重野 康人 (68回)

混雑する日曜日の横浜中華街。「おめさん、だれらつて」「久しぶりねえ」「元気だった」

平成十七年十月二十三日、こ

の日、「青山68会」卒業四十五周年の記念パーティーが横浜中華街で開かれた。

なぜ横浜で？ 我々68回卒業

生も節目節目に新潟で同期会を開いてきた。しかし、今回は「たまには東京方面で」という声が出て、在京の幹事が鳩首協議、新潟から参加する仲間からのもてな

しを、それに、それは横浜の中華料理が一番、という



まで話は尽きなかった。翌日は、ゴルフ大会と鎌倉散策。秋晴れに恵まれて、心ゆくまで懇親を深めた。



記念パーティーには新潟からの十七人、女性九人を含め五十八人が出席、おいしい料理に舌鼓を打ちながら、思ひ出話や近況報告に花を咲かせた。中には、卒業後の大半をヨーロッパで過ごし、今回が初参加という者もいて、四十五年という年月の長さをあらためて実感することとなった。

校歌斉唱、応援歌「丈夫」の合唱と、気持ちの高まりを押さえきれないまま二次会へ、高層ビルの二十七階で、横浜のすばらしい夜景をながめながら遅く

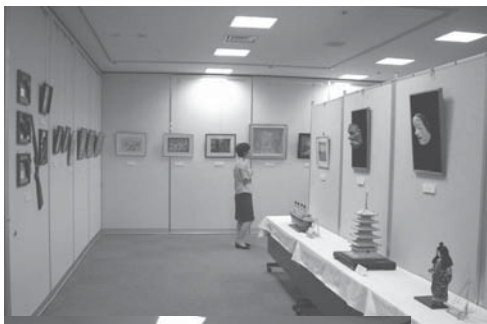
我々が卒業した昭和三十五年は、いわゆる「六十年安保」の年、安保反対を叫んで若者たちは高揚し、そして挫折、巷には橋幸夫の「潮来笠」が流れた。あれから四十五年、なお現役で活躍する者もいるが、多くは高度成長を支えた企業戦士としての役割を終えた。年金生活に軸足を移しつつ、ゆつくりと第二の人生を歩みだしている。そうした状況を再確認した今回の卒業四十五周年記念パーティーであった。

第二回68会作品展開催

池主 憲夫 (68回)

昨年九月「第一回作品展」を終えた段階では、次は何年後にやれるかなどと思っていた「第二回展」が引き続き今年も開催されました。ここにいたる経過については色々ありますが、主たる理由は、その後、関係者が集まるたびに、アルコールの力が作用して非日常的な元氣と発想が沸き起こり、気がついたら決行していたということです。

この背景として、昨年の経験によりますます磨きがかかった若松、田中(宣)、岩原など幹事団の企画力と行動力、会場のレイアウト等に他の追従を許さぬセンスを発揮する渡辺(洋子)など現場の力の集結、北村同期会会長のもとで以前から充実している68会ホームページなどの影響が大きく関与したことは言うまでもありません。



68回は、「老年学」での前期高齢者六十五歳～七十四歳「になろうとする年代です。別名ヤング・オールドといわれ、比較的健康で経済的にも安定した世代とされていますが、見ようによつては中途半端で日常の行動に悩む世代ともいえます。その世代的な特徴の表れかと思える現象がこのところ起こり始めました。

まずは、作品展との関連で、

飲み、食べ、歌い、語り合った 第72期「還暦記念同期会」

古俣 慎吾 (72回)

私たち72期は、高校三年の時に船木一夫の「高校三年生」を歌い、ケネディ米大統領暗殺の宇宙中継に衝撃を受け、戦後六十年を生きてきた世代である。炎暑が残る九月十七日、西堀のホテルイタリヤ軒に九十三人が集まった。

いるいる、あの顔、この顔。懐かしい友と早く盃を酌み交わしたい。ノドが鳴るのだが、恩師への花束贈呈、全員の記念撮影、校歌斉唱、逝去した人への黙祷、丹羽会長の挨拶、恩師の励まし言葉……と還暦同期会ならではのセレモニーが続く。佐武(旧若松)さんの発声

時々集まって絵を描こうという「68会画塾」の結成、その画題としての野菜などを栽培する「農園開拓計画」、さらにはそれを食べる為の「料理教室参加計画」等々です。少しずつ同期の輪が広がりがつつ、これから、どこへ向かって歩むのかは不明ですが、今は、来年の「第三回68会作品展」開催がすでに決まったことのみ、とりあえず、ご報告しておきます。

君のリードで肩を組み、拳を突き上げて「ますらおの」と声を張り上げる(立川君の声が高すぎる)。六十五歳になる二〇一〇年に次の同期会を開催することにして、万歳三唱で散会。ほぼ全員がホテル内の二次会場に移動して、さらなる大宴会に発展した。

後日、幹事から当日の写真が送られてきた。集合写真以外はCD二枚組みで静止画は百枚以上。動画で当日の様相もリアルに再現。デジタル時代を彷彿とさせる同期会であった。



82期同期会 33年目のおとなの修学旅行

小林 しほり (82回)



「そうだ、京都に行こう！」話の発端は恒例の夏の同期会。盛り上がる二次会の席上で、三十三年前の奈良・京都修学旅行の思い出話が次々とあふれだす。名所旧跡・名刹を廻ったはずなのに、飛び出してくるのは車中のいたずらや旅館で騒いで先生に叱られた話ばかり。五十歳を迎えた我々(若干、四十代もいます)、「今こそ、おとなの京都を体験しよう！」と修学旅行を企画する運びとなりました。

十一月の二十五日(金)～二十七日(日)の今年最高の紅

葉シズン、男性四名(石崎・栗原・早福・富山)、女性八名(小野本・小林・駒井・古谷野・七里・島倉・富永・八木)の総勢十二名で挙行(参加地域は新潟、東京名古屋から)。真如堂の「この世のものとも思えない」深紅の紅葉、貸切りで滞在した筋屋町の町屋(屋根裏のベッドルームまである6LDK)、早朝のしかも団体お断りにもかかわらず快く迎え入れて「諸法実相(この世の中のどんな辛いこと哀しいことも、ありのままに受けとめる穏やかな心)」を静かに説いてくださった妙覚寺のご住職、重要文化財・裏千家今日庵での国賓級の丁寧なおもてなし

これほど充実した旅行が可能となった背景に、事前のリサーチも含め膨大な知識と熱い想いで終始まとめ役・ナビ役を務めてくれた栗原隊長と、京都在住経験に基づいたおやかな心配りをしてくれた古谷野(旧姓：萩間)さん、そしてある時は紳士淑女に、ある時は新潟弁が飛び交う少年少女となつて抱腹絶倒の場面を展開してくれた参加メンバーの存在があります。ホントにいい仲間たちです。ありがとう!!また行こうね!

第83期青山同窓会(昭和五十年卒業)

三十周年同期会の報告

第83期代表幹事 吉水 敦 (83回)

平成十七年八月十二日(金)に第83期青山同窓会三十周年同期会を開催しました。同期会に先立って十六時より新校舎見学会・十六時三十分から十八時までは新校舎の視聴覚教室で記念講演会を開催しました。記念講演は同期生二名お願いし、木下康司君(財務省大臣官房総合政策課長)の講演は『日本経済の現状



と課題』・森達也君（映画監督）は『未遂に終わった夏休みの初体験（世界はもつと豊かで人はもつと優しい）』で約三十名の参加がありました。講演会会場の視聴覚教室（一学年全員が入れる階段教室のような施設）をはじめとして新校舎はとても立派な施設で今の県高生は恵まれているなと感じました。

同期会は新潟東映ホテルで十八時三十分から受付、十九時から二十二時まで宴会といつた内容で松浪清先生・曾我浩先生・上杉雅之先生・永井成一先生の四先生と約百二十人の同期生が集まりなかなか盛況で、開催日が平日の金曜日といったこともあり参加者が少ないのではないかと心配が杞憂に終わりました。松浪先生に車椅子

第86期 同期会報告

玉木 正己（86回）



子を用意していたのですが全く不要でしたし、先生方全員が昔の生徒の名前をよく覚えておられたのにはビックリさせられました。五年後の同期会開催予定日（今からもう決めていきます）の平成二十三年八月十二日は土

曜日でありもつと多くの参加者が見込めるのではないかと期待しています。後日上杉雅之先生からねぎらいの葉書をいただき感激したことを最後に記したいと思います。

と、なんと第一回での集計では六十名。ガガーン、どうする…

当然、一次会で終了するはずがなく、皆なじみの店へ…新潟の暑い夏の夜を楽しんだ同期会でありました。次の開催は、区切りがよいときにしようという事で、二年後の卒業三十周年で再会することになりました。また多くの参加者で盛り上がりたいたいものです。（次は大功の百五十名！）

平成十七年八月二十日（土）新潟グラインドホテルにおいて、86期同期会が開催されました。

他の期のように、卒業後〇〇年で開催ということなく、卒業後一回も同期会を開いてない期なので、「なんとか集まるう」という応援団長（星野）のかけ声のもと初めての同期会の準備が二月より始まりました。先輩諸氏から百名集まれば合格、百五十名集まれば大成功と言われ。ややプレッシャーを感じながら出席の返事待っ



去る平成十七年七月十六日（土）に88回卒業生の同期会を、シルバーホテルで行いました。

当日は百十六人（うち女性三十一人）という多数の人に参加してもらい、大成功でした。

新潟県外からもわざわざ多くのひとが参加してくれ、中には実家がすでに新潟にないにもかかわらず、来てくれた人もいました。

元々この会は、昨年の青々会の会合で、期幹事の渋谷君に、



と、高校時代と同様に若々しい人、太って髪も白くなったり、薄くなったりして見る影もない人など様々でした。（私が一番無残だといわれましたが。）

渋谷君の挨拶に始まり、一番遠方の九州から参加してくれた小竹君の乾杯で幕を上げました。司会としてBSNの谷内君が場を取り仕切り、軽妙なトークで盛り上げてくれました。

88回卒業生同期会開催報告

石原 基規（88回）

青々会からの報告

荒木 武 (98回)

二十周年でできなかったから、是非二十五周年ということで同窓会をやる」と誘い、十一月に各クラスから二名ずつクラス幹事になってくれるように頼み込んで、幹事会を開きスタートさせました。

渋谷君は責任感の強い男で、すべてを取り仕切ってくれて、彼の活躍なくしてはここまでの成功はなかったと思います。特に同窓会用のホームページを立ち上げ、参加予定者・住所不明者をリストアップし、こまめに更新してくれました。どんな人が参加するのか私も楽しみにチェックしましたが、毎日百三十人あまりの人がホームページにアクセスしており、関心の高さをうかがわれました。

次は五年後くらいにもう一度やってくれという意見が多く、区切り区切りの年にできたらなと思います。

最後に一言、渋谷君本当にありがとう、お疲れ様でした。



青山同窓会の皆様こんにちは。同窓会への若手の参加が少ないという事で、二十代、四十代を中心とした若手同窓会「青々会」が発足して一年以上が経ちました。

会員数も増え、これからは楽しく中身の濃い活動を増やしていこうという事で、去る九月十七日イタリア軒にて、パネルドイスカッション「激論！なぜ『新潟は杉の木と男の子は育たない』のか？」を開催いたしました。百名以上の卒業生の見守る中、五十代の篠田新潟市長を筆頭に、各年代の新潟高校OB・OGがパネリストとして参加し、ユニークな議論を展開いたしました。進行役をお笑い集団NAMARAの江口代表（注：この方は新潟高校卒ではありません）が引き受けて下さった事もあり、笑いが絶えず大変盛り上がった会となった事をご報告いたします。また、ゲストとして上杉先生、斉藤先生、山崎先生、板倉先生をお招きしたため、各年代の卒業生達との間で昔話に花が咲いた事はもちろん、こ

れからの新潟を盛り上げて行つて欲しいと熱いエールもいただき、事務局一同大変うれしく思っております。

また、当会報の第八十号にも掲載がありました。昨年、三十二歳の若さで急逝された保莉実君（98回卒）の基金についても報告がありました。保莉君は独自のアイデアで歴史学の世

OB会報告

フェンシング部 OB懇親会の報告

遠藤 聡一 (87回)

八月二十日（土）関屋浜海水浴場「曾我廼家」において、フェンシング部OB懇親会を行いました。お忙しい中歴代顧問から赤井田秀光先生、OB二十二名にご出席を頂きました。例年開催時期を一月にしていたのですが、今回は夏の海辺で開催しようという事になり、関屋浜の浜茶屋で納涼会として行いました。当日は海から海パン姿で登場す

る先輩もあり、納涼会らしく終始リラックスしたムードの会となりました。参加したOBの年齢も先輩の方から若手まで幅広く、OB会ならではの交流が楽しく出来たのではないかと思います。会の開始後すぐに激しい雷雨となりましたが、海上に閃く稲妻は大きな線香花火のようで、盛り上がった会に花を添えてもらったようです。あつとい

う間に時間が過ぎましたが、最後は「丈夫」で会を締めくくりました。

来年も、歴代顧問の先生、OBの交流と現役への支援を目的に、同様に開催したいと考えておりますので、お誘いあわせの上多くの皆様にご参加いただければと思っております。



青山バドミントンクラブ

総会報告

高橋 裕之 (84回)

平成十七年九月十八日青山バドミントンクラブ恒例の、OB・現役合同納涼バーベキュー大会が、信濃川河川敷にて、総勢三十八名の参加で開催されました。幹事団の行いの良いせいでしょうか、ここ五年くらい雨に見まわられたことはありません。今回も暑いくらいの天候で、日焼け止めクリームを塗りながらの作業となりました。事前に今回のOBの参加者が少ないということで、準備等の関係で開催が危ぶまれましたが、なんとか今回も継続開催することが出来ました。

た。（よかった！）しかし、始めれば始めたで楽しいもので、今回は、島根から夏休みを使って来てくれたOGや子供連れで来てくれたOG、そして、顧問の先生方も三名も参加していただきました。あつという間に時間が過ぎていきました。豚汁も焼肉も焼きそばも余ることなく丁度良い量でした。現役の生徒諸君も、日ごろ持っているシャーパーンをトングとさばしに持ちかえ、焼き作業に汗をふきふき頑張ってくれました。今回の収穫は、総会で購入が

決まっていた応援旗の具体的な大きさ、表示内容、字体などを決めたことです。折角だから今持っている旗よりも大きいものを作る事と字体は同じで明瞭にするという内容になりました。男女異なる会場の時は、今度か



ら別々に持つていく事が出来るので早急に製作に入る事になりました。また、クラブ内で部活動をやめようとしている部員が一名いて、OBや部員の話聞いて、納涼会参加者の前で「やめないでもう少し頑張る!」と一いつて宣言してくれたことがOBにとってうれしいことでした。誰でも一回はやめようとか迷うものです。途中であきらめるより、三年間通して仲間と一緒に頑張るということが価値のあることだし、卒業後やめないで良かったと必ず思うことを、我々OBOGが現役生に教えて、気づかせてあげなければいけないと切に思います。次回行事は合同練習会と年末の集いです。

葦原同窓会に出席

一〇〇年ぶり和解の握手

ボートレース乱闘事件

七月十六日(土) ホテル新潟

渡辺 研二(75回)

三校対抗ボートレース事件から一〇〇年目にあたる本年(平成十七年)に和解の握手をして水に流しました。

約三百名のOBが集まった葦

原同窓会総会のなかでセレモニーは行われました。事件のいきさつをスライドで紹介後、青山同窓会からボート部OBの青山艇友会佐藤勝弘(65回)会長

と渡辺研二(75回)副会長の二名が登壇。佐藤会長が「百年を機に光に置き換え、交流と親睦が深まればいい」と挨拶。その後葦原の石堂平也同窓会長と最高齢出席者の横山嘉一さんが壇上にあがり、「また、信濃川でボートレースをしましょう」と固い握手を交わしました。

百年前の乱闘事件は、簡単に言えばけんかです。あんまり表だってほしくないとの気持ちがありましたが、マスコミの注目を集めたようで朝日新聞、新潟日報が記事に。総会当日も新聞社とテレビ局が取材に訪れていました。

和解企画のきっかけは、新潟商業側が「節目を機に仲直りを」と青山同窓会に話をもちかけたことで具体化し実現。青山同窓会ではボート部OB役員等と協議



し青山艇友会から二名が出席することになった次第です。

■三校対抗ボート事件とは

明治三十八年(一九〇五年)秋に信濃川で三校対抗端艇競漕会が行われた。新潟中学(新潟高校)、商業学校(新潟商業)、新潟師範学校の第一選手、第二選手、第三選手の各クルーの対抗得点で最高点を得た学校が優勝旗を獲得するというもの。

第三選手、第二選手対抗終了時点で商業が優位に立ち、中学が優勝旗を得るには最終の第一選手対抗で勝たねばならなかった。競漕の結果次第で総合得点と優勝の行方は変わってしまう状況だ。第一選手対抗戦は前半商業にリードされたが中学は猛烈な追い込みでほとんど同時にゴール。新潟商業にわずかな差で敗れた新潟中学が「ゴール直前に新潟商業の艇のオールがふれた。無効試合だ」と再レースを主張。混乱の中、新潟中学の生徒が優勝旗を奪い去った。

新潟商業は後援会などが寄付した別の優勝旗で行った優勝祝賀のちようちん行列を新潟中学の生徒が襲うなどし、両校の関係はさらに悪化。十一月六日、新潟中学の生徒約百五十人が優勝旗を奪おうと新潟商業に乱入。新潟商業の生徒も応戦し、双方に八十人ほどの重軽傷者が

出た。

仲裁に入った県は「優勝旗が悪い」としての優勝旗を三つに切り、師範学校を含めた三校に配って事態はやっと収まった。

青山体友会

中川 弘(58回)

徳川三代将軍家光が行った政策「五人組制度」というのがある。「五」という数は、お互いの腹の内をおきなく語り合うのに、ちょうど良い数である。体操部にどうして入ったのですか「こうだ。こうだ。」「へえなるほど。」「五人の心はしっかりと体操部の昔話に結ばれる。十九回青山体友会は十月二十三日ここに始まる。年を老いて体調不良さまさまの中、五

人の集まりである。いつもとちがいが、しっかりと結ばれるのは久しぶりであった。体操は体を操ると書く。すべての運動の基礎である。



戦後めざましい進歩の体操も目をとじると、新潟中学の体操部より新潟の体操は始まったのである。その体操部出身ですと胸をはって人生が始まる。倒立、転回、空中に舞う車輪、ああ美しい力強い体操は体で書く芸術である。昨日より今日と練習によって体の感性をきたえる。鉄棒につかまれば、平行棒につかまれば、体はひとりでに動く、前後に転回する。誰が何といおうと体操をしたい、好きである。早く夜が明けないか、体操をするために飯をくう、ねる、すべての目標を体操に捧げたのである。その五人がここに今日集まる。お互いに何もいわずに、先輩後輩ありがとうございました。次から次へと酒もすすみ、

話に華が咲く。新潟の体操の歴史の初期をつくった我々だという認識は、かくも強く素晴らしいものである。途中で、とだえた青山体友会も復活19回もつづいているすばらしい事である。長嶋茂雄の「巨人軍は永遠に不滅である」の名セリフは、その

ま、青山体友会にもあてはまる。出席者板谷啓司(51回) 土田卯八郎(51回) 渋谷興司(53回) 中川弘(58回) 中野文郎(59回) はなごりおしく、来年の再会を期し初秋の東掘りを去ったのである。

青山水友会から

青山水友会事務局 横瀬 功(66回)

「丈夫」の替え歌が、わが水泳部歌である。

「紅のふんどし締めて月の夜に西瓜をがめり、見つけれられ禪とられ、丸出し丸出し丸出し！」 あどけない高校生を作ったあつけらかんとした歌である。

笑いながらこれを歌って、八月六日総会が開かれた。

プールの水は、水晶のようにキレイで往年の晒粉を投げ込んだエメラルド色の昭和のプールとは世界を異にする。しかし、選手とOB・OGが上げる飛沫は、変わるはずがない。

先頃成立した個人情報保護法が、水友会の名簿にどのような



影響を与えるかを、真剣に議論した。しかし、読売新聞グループ本社副主筆・永井梓さん(62回)の一言で決着が着いた。

「この法律は、日本を匿名社会にしたいためのもではない。水友会という仲間内々の名簿、もし悪用する奴がいれば、そいつが悪いのであって、名簿の罪ではない。現状のまま続けるべきだ」と。

もし、会員で住所などの削除を希望する人は、事務局までお

知らせいただきたい。

もう一つ、平成十八年度の総会を平田大六さん(60回)が村長を勤める関川村で開こうという声が上がった。宴会の席で奔放なアイデアが次々述べられた。いまや町村合併が進み、全国で村の数は激減する。関川村は、その貴重な生き残りの一つになるとのこと。平田さんが

青山剣友会(剣道部OB会)

平成十七年度活動報告

事務局代表 町田 一越(95回)

村長をしているうちに、村の活性化にはほど遠いが、この村を本拠地に水泳部員は合宿練習をし、先輩はバーベキューでこれを慰問するという計画である。関川村内の荒川には河童の出る淵もあるとか。それとの邂逅も楽しみである。

事務局：〒950-2015
新潟市西小針台2-6-26

一、関崎睦男会長(45回)が、永年の剣道に関する功績を讃える「平成十六年度剣道有功賞」を受賞、全日本剣道連盟から表彰されました。

二、田辺先生に感謝する会(七月二十三日イタリア軒)を開催しました。田辺隆先生は新潟高校体育教諭として母校剣道部顧問を二十年務められ、今年三月末に新津高校で定年退官されました。直接指導いただいた85回から105回卒の会員主催で五十二名の参加者で行われ、青山剣友会も協賛し、先生の「第二の人生」をお祝い致しました。

三、「第五回平石杯争奪親善剣道大会」(八月七日新潟高校

剣道場)を後援しました。優勝は新潟商業高校(二回目)。

四、総会を八月十四日に開催しました。ご来賓として青山同窓会から長谷川義明会長からご出席いただき、45回から112回卒まで総勢二十二名が参加致しました。

五、その他、毎月一回母校剣道部と合同稽古を開催しております。開催の案内は毎月E-mail通信にて近況報告と併せてお知らせしてまいります。今年の開催日は以下の通り。一月二日、二月五日、三月十九日、四月十六日、五月二十一日、六月十八日、七月二十三日、八月十四日、九月十七日、十月八日、

十一月十二日、十二月十七日(予定)。また年二回会報を発行し、新年会・総会のご案内や会の活動報告、会員・母校



関崎代表

青山柔道部OB会総会

会長 結城 俊郎(62回)

剣道部の近況を四百名の会員にお知らせしています。



挨拶する田辺先生

平成十七年十一月十九日 錦城閣において青山柔道部OB会総会が開催されました。

現役の現況報告が加藤先生からあり、部員数は八名、オリンピックや国際大会での日本選手活躍などもあつてか、未経験者の入部が多く、手塩にかけて育成しているとのこと。半年を経て風貌も引きしまり、将来にむかつて、真直な柔道を体得して欲しいとのことでした。

今回OB会会長が交替することになりました。新会長は72回卒立川克雄さんです。

歴代会長任期十年の慣例が今回も守られたことになりました。新会長としてOB会として後援会から改称された意図を重んじて、会員の絆を大切にしたいとの意思表示がありました。

具体的な役員の選任は、新年を迎えてから急速に進むことになりましょう。

懇親の場では柔道部旗(新潟中学)に対する先輩の熱い思ひなどが語られ、盡きぬ話に時間を忘れて絆を実感いたしました。

部歌「王風吹ゆる北海の…」と高らかに歌い上げ、熱気さめ

やらぬ中でおひらきとなりました。

副会長 三名
事務局 二名



東京青山柔道部 OB会開催

十一月十日、都内ホテルにおいて開催されました。参加十八名

今年是在京OBの積極的な組織化と若い人の参加を図ったことで盛大に催されました。この活動がさらに広げられることと存じます。

東京柔道OB会も平成十八年四月より、新役員体制にて運営されることになりました。

新役員

名誉会長 斉藤伸雄（44回）

現会長

長 佐藤信秋（74回）

（国土交通省事務次官）

本間日出男先輩の ご冥福をお祈りします

前柔道部OB会会長本間日出男先輩がなくなられました。

体調を崩されていると伺っておりましたが電話で激励をいただいたこともあり、こんなに早くおなくなりになるとは考へてもみませんでした。

自らに厳しく、稽古に厳しく、人に暖かく接しられ、王道をゆく柔道を指導して頂きました。

学校柔道が戦後解禁になりました。昭和二十六年でした。道場開きが青山柔道部後援会の御努力で挙行されました。

先輩による紅白試合が行われ真剣白熱の試合が眼前で戦われました。

その時の大将が本間先輩と、小島松栄先輩でした。贅沢にも全日本級一流の技が眼の前に繰り広げられた訳です。夢見心地で見入ったものでした。

その両先輩も相次いでおなくなりになりました。残念な気持ちでいっぱいです。

本間日出男先輩の御冥福を心からお祈り申し上げます。

『ボンクレバンド' 05』 開催しました。

吹奏楽部OB会長
上原 学（99回）



はじめまして、吹奏楽部OB会です。当OB会の母体である吹奏楽部は、軽音楽部『ジョリー・チャップス』の流れをくむ、古くて新しい部です。昭和六十三年、新入生の四名が、軽音楽部の器材、練習場所を借りて吹奏楽を志したことに始まり、平成元年には青山祭で最初の演奏会を開催しました。平成三年には吹奏楽コンクール高校B（小編成）の部に初出場。以降、県代表六回の栄に浴してい

ます。また、平成十一年三月に初めて開催した定期演奏会は、現在、吹奏楽部最大のイベントとなっています。

当OB会は、平成八年八月、現役部員の支援とOB間の親睦を目的に発足しました。主な活動としては、年二回の親睦会、定期演奏会や吹奏楽コンクールにおける裏方のお手伝いや資金支援といった現役部員のバックアップを行っています。

ところで、音楽系サークルのOB会といえば、OBバンドが一般的な形態ではないでしょうか。しかしながら、当部の場合、卒業と同時に新渦を離れるOBが多く、また、卒業を機に楽器から遠ざかるOBも数多く存在します。

そこで始まったのが、『ボンクレバンド』なる催しです。『ボンクレ』とは、言わずもがな『盆暮れ』。この催しの発起人であ

るOGが、「盆暮れの時期くらい、気軽に楽器を構えられる機会があれば」と言ったことにより来します。実際は、年一回、お盆の時期に開催するのが精一杯な状況ですが、毎年少しずつ参加者も増え、今年は、去る八月十四日、吹奏楽部顧問である五十嵐先生（81回卒）のご厚

青山バレーボールクラブ 第十四回総会

計良 伸正（63回）

日 時
平成十七年十一月十九日（土）

会 場
ウェルシテイ新潟

昭和五十四年夏、第一回を開催してから「オリンピックの年に集まろう」という申し合わせで続けてきました。しかし、いろいろな出来事や思惑もあって間隔は長くなったり縮まったり。昨年は「アテネ五輪」だったので開催する筈でしたが、「中越地震」のため中止し、今年に持ち越されました。

参加者は三十六名。今までよりちよつと多いかなという状況でしたが、県外勢も八名駆けつけてくれ、大いに湧く総会となりました。

特筆すべきは、初参加者が十一名を数えたことです。しかも平成卒の若手が八名で、今後の会の発展を考えるとこの上なく嬉しい限りでした。松井現顧

問をはじめ多くの方のご協力で、72 回卒白井秀昭幹事が若い世代の名簿を発掘整理してくれました。もちろん個人情報、しっかりと管理しております。

62 回卒小林政弘を代表とする幹事会は、多くの若い参加者を迎えて、従来通りの会の持ち方ではなく、若者を惹きつけ「次回は仲間を誘ってこよう」と思わせる「新機軸を出さなければ」と考えました。

「語り合う」「飲む」という会の性格からして内容は制限されますが、次のふたつを盛り込みました。

・講演

『新潟のまちづくり』

61 回卒 長谷川義明

・リレートーク

『青山バレーボール部のあゆみ』

58 回卒 遠藤 整治

63 回卒 片桐 重雄

現顧問 松井 哲郎

松井氏は身内のご不幸で欠席されましたが、戦績報告のレポートをいただきました。

県外からの参加者、初参加者の自己紹介の頃から座がほぐれ、五十年のトシの差を超越して飲み、語りました。最後は陣を作り、肩を組み、新旧校歌・応援歌を咆哮し、再会を約してお開きとしました。

追悼

『田村誠一先生を偲ぶ』

大塚 忠雄 (77 回)



この文を書いている今、二日つづきで氷雨まじりの強い北西風が吹いています。

平成十七年も、嬉しいこと、悲しいこと、いろいろありました。一番悲しくて残念なことそれは十月四日未明、公私にわたる卒業後もご指導いただいていた田村誠一先生が、ご逝去されたことです。三月に何度目かの入院をされてより、病状の悪化を感じつつ、覚悟はしていましたが、とうとうその日が来てしまいました。春の北信越大会の頃は、TV を見れた体力も。教子(88 回卒大越健介君)の子供が活躍した、夏の甲子園大会の頃には、それも儘ならない様子でした。先生は私が野球部に入った昭和四十一年より、監督となられ、中央高校に転勤されるまで、二十余年に渡って指

導にあたられました。その長い期間、ご家族と過ごされる時間を犠牲にして(シーズン中、日曜日は無いに等しい)、私達の三百五十人余りの部員をご指導いただきました。先生の指導は一貫して「個人の自主性を大事にする」「欠点を直すより、長所を伸ばす」ということであり、理解しています。ご葬儀の折、一人娘でいらつしやる直子さんに、「子供の頃、随分さみしい思いをさせたのでは」とお詫びしたら、「私も今、ソフトラテニスの指導で休日は父子家庭にしています。父の道をなぞっています。」と、おっしゃられました。その言葉をお聞きし、一緒に過ごす時間は少なかつたかもしれないけれど、背中でお子様を育てられた先生の偉さを、私自身の半端な子育てを振り返り、改めて感じさせられました。先生との最後の会いた文字でした。「宴会の夢を見た」「お前シヤベレ」我々教子子連中が先生のご自宅に押しかけ、ご夫婦で作られた料理を肴に、飲んだり食べたり、話を

したりした光景を思い出していたのでしょうか。私は「体が良くなつたら又一杯やりましょう」「夏の予選の見通しはかくかくしかじかです」「一方的に話をしました。四年前に志賀哲夫元部長先生をお送りし、今度は田村誠一元監督先生をお送りすることになりました。今までは何か文章を書かなければならない時、英語は志賀先生に、日本語は田村先生に添削していただき笑われることを免れていました。が、もうそれも出来ません。この文を先生が見られたら、又大幅に朱線を入れられていたと思います。出来の悪い教子をお許し下さい。

これからも、私達野球部 OB は、母校が甲子園に一歩近づき、出場できるよう先生のご意志を継いで頑張っていきたいと思います。先生がご存命の時、話が出ていました、野球部へのマイクロボスの寄贈も十月末に実現いたしました。

私も、もう何年もたらず還暦という年になりましたが、今暫く先生の方には、行けません。申し訳ありませんが、こちらのほうで日本酒の燗を付けてお待ち下さい。

最後に改めて、ご遺族への感謝の気持ちと合わせ、先生のご冥福をお祈りいたします。

山岳部の祖 小林光衛さん

加藤 清策 (70 回)



として、岩壁登攀、厳冬期登山等、より高く、より困難な山行を数多く重ね、必死になつて何かを追求められた。

三十四年大学卒業と同時に帰郷、高校の国語教師となった。新潟高校山岳部へは三十三年の夏合宿から参加して、指導。その教えは厳しかった。夏の合宿では四十 kg を背負って歩かされた。「二人がバテたら、その人のザックを担げ、それがチームワークだ」靴紐の緩みにも容赦ない叱責が飛んだ。テントの設営はどんな時でも五分で張られた。「山に入れば衣、食、住、体力、天気予想能力、すべてがそのパーティーの責任となる。一人の失敗、不注意が全体の命となる。そうならぬよう徹底的に訓練する」私が新人であった三十四年の夏の飯豊合宿で、大熊尾根の急登とザックの重さに根を上げ、尻を叩く光衛氏の顔を何度も恨めしく見つめたが、幕営地に着き、光衛氏のザックから大きなダンボールの箱に入ったジャガイモを見た時、我々より重い荷を背負っていた

のだと気付き、その恨みと反発は消えた。他校の教師でありながら、母校の山岳部を指導することは今では考えられない事である。旅費、食事すべて自腹で、危険と責任だけが重く、何の報酬もなかった。無償の行為である。ただ山が好きで、山岳部の先輩であると言うだけで我々を指導してくださった。

四十一年新潟中央高校に赴任。六十三年新潟南高校に転勤されるまで二十二年間同校登山部の顧問として女子生徒を指導。その内容は、我々と同じく、厳しい訓練と基礎を重視したものであった。同校登山部は四十七年から三年連続全国大会最優秀チームとして表彰され、その登山技術は全国でも高く評価された。その後も全国大会の常連となった。

四十二年から文部省登山研修所の講師となり、五十年七月まで全国規模で高校登山界に尽力された。

平成八年新潟南高校を定年退職。光衛氏は、現職中の登山において一人の生徒も、彼自身も怪我の一つもなかった。教職を退かれてからは、「角田山、自然まもり人」として角田山の自然保護に尽力。小林光衛氏は家族、酒、生徒を愛し、最後まで偉大な山男であり教師であつた。

同窓の新刊

画集

「新潟市スケッチ」

小林 晋一（67回）著

同期のドクター小林晋一さんが画集「新潟市スケッチ」を出版。

昭和六十二年から平成十六年迄新潟市医師会報（月刊）表紙を飾った百三十枚あまりを年代順にまとめたもの。新潟市の懐かしい風景、今は無くなった街角もある。

中学生頃も絵が好きだったという彼は、忙しい病院勤務の間、絵画部に属し、暇を作り出して腕を磨いた。

新潟市展、県展、光陽会展に

『高志の城柵』 —謎の古代遺跡を探る—

（高志書院）
小林昌二（69回）著

平成十六年度創設の青山学術文化講演会で最初の講演をした新潟大学大学院教授の小林昌二

さん（69回）がこのほど表記の本を上梓した。「新大人文選書」の第一巻と

（合掌）



いう側面を持つ専門書であるが、副題にあるとおり謎解きのスリルに満ちた、ロマンあふれる読み物になっている。淳足柵から沼垂城へ。更に、わが町沼垂との関係はどうか。

「北へ向かつて、東北の城柵まで何もなかったように思われることがある。同じ規模のものがここにあって、まるでコシの国が空白地帯のように映るのが悔しい。」筆者が直接解説をするときの口調は、冷徹な学者の目で古代日本の社会全体を俯瞰しながら、故郷の足元に横たわる貴重な遺跡に思いを寄せ、熱い。

昨年の講演で沼垂城木簡の世界に目を開かれた方々は、いいタイミングで出たこの本で、その世界を改めてたつぷりと堪能することができよう。

山田 栄（69回）

寄稿

「南山城下の独擅場」は何処

早福 卓（55回）

富所強哉先輩！ご無沙汰いたしております。同窓会報八十一号の寄稿に接し、卓抜した発想で「南山城下の独擅場」は百年前の三校ボートレースの優勝旗奪還の戦争？を指すとの記事を読み、万福の敬意を込めて賛意を表します。

小生ら四十五名は三学年二期に入った頃、戦時下の県からの命令で「県民修練」の名目で木村晋先生の実家である西蒲原郡味方村（現新潟市）の高念寺で五十日間の晴耕雨読の合宿をした事がありました。この住職の広川知恩さんは三校ボートのレースが大騒動となった時、当時新潟中学の三年生でありながら五年生の仲間に入って着剣をした鉄砲を持つて商業高校攻撃に参加して「放校処分」になったかたです。広川知恩先輩はその後大谷大学に学び、その時柔道の修行に励み、郷里に帰ってからも柔道六段の腕で普及に尽力されました。そのご子息の広川彰恩先輩（52回）は大学チャンピオンで講道館八段。高念寺

で「正信偈」を覚えていただき、三校ボートレースの優勝旗奪還戦争の話も父親知恩和尚さんから聞いた話として聞かせていただいた。ダルマと言う綽名の先生が銃器庫の前に座って「天皇陛下の銃を喧嘩に使うのは許さん」と言つたのを五年生が「しばし縄目の恥を許して下さい」と縛り上げ、銃器庫の鍵を壊して武装し、着剣をした上で新商に向つたそうです。当時の状況から新商側も既に新中生の突撃の情報を得ていたと見え、校舎の二階から大量の石が投げつけられ、また「硫酸」もとびかうなどしたため、怪我や火傷した生徒もいたと言う。冷静な五年生の指揮者が素早く一隊を新潟高等女学校の裏門側から新商の裏手に廻る事を命令したとの事。この両面作戦が成功して新中生は新商の校舎を占領しましたが、商業の同窓が中心となつて製作した「優勝旗」は奪えなかったとのことでした。（※編集部注：三校（新潟中学、新潟商業学校、新潟師範学校）ボ

トレースは一回目は新潟中学が優勝。二回目(明治三十八年十月五日)のボートレースは新潟中学、新潟商業の二校が最後までつれあい、審判は新潟商業の勝ちとし優勝旗を新潟商業に渡そうとしたが、新潟中学生が奪い去っていた。)

「青山百年史」にも新商の校舎は現在の歯学部的位置にあったと記載されていますが、私は知恩和尚のお話からみても、新商の校舎の位置は新潟大学付属病院の所が正しい位置だと信じ

中国生活の思い出

上村 (川瀬) 嶺子 (68回)

既に戦後六十年を経過して戦争体験者が次第に減少して行くなかで戦争による悲惨さを後世に伝える一助として私の体験を思い出すままにまとめて見ました。

私は父(川瀬金次郎)が大陸科学院に奉職時の一九四一年一〇月新京(現長春)で生まれました。兄二人と弟三郎一人が居ります。一九四五年ソ連参戦、敗戦など記憶にありませんが、新京郊外の疎開先から新京市内に戻った頃から私の記憶が始まります。ソ連軍が突然侵入してきて私達の私物を略奪し始め、

ています。

59回の関根彰円(安浄寺)和尚の「独擅場」論も学者の説明と有り難く受けとめますが「霞たなびく青山の・・・」が校歌のように歌われていた話は35回生の沢山巖先生から聞かされていきました。この作詞者は不明ですが、富所先輩の推理通り、「南山城下の独擅場」は三校レースの優勝旗奪還戦争の古戦場を示したという解釈は私には正当性があると思います。

南嶺の官舎はソ連軍に追い出されて転々と移り住むはめになりました。一九四六年八路軍(共産党軍)と国民党軍(蒋介石軍)との市街戦が始まり、翌年には八路軍が優勢となつて十月には電気、水道、ガスのすべてが使えなくなり、夜はお皿に注いだ油に木綿の布切れを入れて点灯したものでした。革命戦争は益々激しくなつて市内では食糧が無くなつてニレの葉や高粱酒の粕を食べる有様で餓死者が多くではじめ、かつての動物園は墓場になりました。日本人の残留者は両軍の交戦地帯の間の

関所(チャーズ)を抜けて脱出する事を計画し始めます。まず先発隊五十名の生死は全く不明でしたが、不安は残りながらも五十名の希望者が父を団長として脱出する事になりました。リヤカーに荷を積みチャーズにはいった途端暴民に襲われ、母が身に付けていた食べ物等を奪おうとする揉み合いで母の背中の弟がずり落ち、当時六歳だった私が抱き取つて逃げました。その時はもうこれで親には会えないものと茫然としているうち、騒ぎも次第に収まって会う事が出来ましたが、私達も孤児になる処だったとぞつと致しました。脱出開始三日目に八路軍側へ出て前後を兵士に守られながら、徒歩、馬車、トラックに乗せられたりして吉林の大学の建物に入り、私は兄達と共に中国人の

『体技心』の市民マラソン

板井 一彦 (78回)

前号、十年先輩の吉岡利昭さん(68回)寄稿の『100キロマラソンを楽しんで・・・』に続いて、市民マラソンのすゝめです。四十八歳で、「ただの?五十歳越えた(サラリーマン)オッサンで終わりたいくない!!」と一念発起。まずは、万歩計つけ

たウォーキングから。公園を疾走してかわしていく学生ランナーに触発されてランナーに。以来五年、会社もブライベイトも、『体技心』が基本と信じて毎晩十二キロ一時間のトレーニングを続けています。何せ、才能のない中年体育会

学校に入れて貰いました。その後父は新設されたハルピンの東北農学校の教授に任命されて家族一同はその官舎に移り住む事になりました。一九五三年、六年生になって日本に帰国するこ

とが決まつてからは、ハルピン、瀋陽、上海を経て帰還船「高砂丸」で舞鶴に上陸しました。帰国といつても私にとっては生まれて始めて眼にする日本の山々を不思議な思いで眺めたものです。両親や兄弟揃つて無事帰国できた私は本当に幸せで、たった一人で帰つて来た子供達もいました。

戦争では敗戦国や戦勝国の双方に多数の犠牲者が生まれますし、もう二度とあのような悲惨な思いは繰り返してほしくないものです。

系です。走る距離だけを頼りにレースを目指します。月間二百五十〜三百キロがノルマ。

先頃迄合併前岩室村教育長を務められた体育の恩師、本田至先生からは、「板井、おめえそんなにペースを上げて走ると死ぬぞ」とご託言を頂戴していましたが、この言葉には従うことなく、いつも「このレースが生涯最後のレース」と思い全力疾走しています。

結果、五年間で八十二レース。フルマラソン十二回、ウルトラ100キロ一回などなど。

市民マラソンシーズンの三ヶ月、九月十一月は、殆ど毎週末の日曜日、各地のレースに出場しています。

記憶(記録にあらず)に残るレースは、吉岡先輩同様、昨年十月九日のくびき野100キロマラ



ゴール写真

練習した分、必ず結果につながるマラソンが生甲斐です。フルマラソンベストは、本年二月の茨城勝田マラソンの三時間二十五分五十四秒。まだまだ更新可能と思つてトレーニングが積み毎日です。

ソ。十三時間二十一分五十九秒(592位/1036人)台風二十二号接近で終日雨の中、朝五時から制限タイム十八時間半の八分前迄、くびき野の峠越え五回。かん難辛苦、死闘でした。

一方、エンジョイしたのは、やはり昨年十二月十二日第三十二回ホノルルマラソン。勤続三十年のご褒美休暇でしたので、家内(十キロウオーカー)と一緒にのそりあ、楽しい三時間五十八分でした。約三万人もエントリする世界最大のマラソンの祭典で、会う人ごとに「NICE TO MEET YOU」

ランナーが皆、友達になれるといった暖かい雰囲気のあるレースです。

スターターは、アテネ金メダルの野口みずき選手でしたっけ。

「江花和郎君」連合新潟会長に就任
盛大に祝賀会開かれる

吉田 至夫 (79 回)

我が青山 79 回生 (昭和四十六年卒) の江花君が平成十七年十一月、連合新潟三代会長に就任した。事務局長二年、五二歳という若さで満を持しての登場である。写真は同期有志で挙行した祝賀会の模様である。

変革期にある労働界の舵取りに氏の手腕が大いに期待されるところだ。

という難しい話は別にして、「めでたい!」と早速、有志が集まり小数ながらも盛大に祝賀会と相成った訳である。場所は新潟グランドホテル。小泉仲之君の司会で、女気無しで花束贈呈を二回もやるどころが時代である。必ず主役そつちのけで盛り上がる

ところも同期の楽しさである。ふと見回すと、江花君以外にも○△長とか、○△議員とかの肩書きも目立つ。「そうだ。我が世代も表舞台に立つようになったのだ」思い起こせば、生まれこの方、我々の前には団塊の世代がいたのだった。な



どと訳の分からないことを思いつつ、最後は白井君の音頭で丈夫を声高らかに斉唱し、二次会に流れていったのである。左記に参加者の名のみ記し、この稿を終わりたい。
石井智裕。石束毅。岡田均。片岡道夫。木村泰博。小泉仲之。近藤浩平。佐々木隆輔。佐藤久一。白井行雄。鈴木正昭。曾根隆夫。長北敏弥 (氏の 81 回生)。夏目克雄。本間義康。横尾尚巳。吉田至夫。

平成 16 年度青山同窓会収支決算書

自 平成 16 年 4 月 1 日
至 平成 17 年 3 月 31 日 (単位 円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 異
前期繰越金	2,286,000	2,286,797	△797
I 収入の部			
入会金収入	860,000	854,600	5,400
会費収入	5,300,000	6,207,500	△907,500
雑収入	1,000	2,623	△1,623
当期収入合計	6,161,000	7,064,723	△903,723
合計	8,447,000	9,351,520	△904,520
II 支出の部			
人件費	1,140,000	1,120,620	19,380
通信費	1,800,000	1,712,081	87,919
印刷費	550,000	443,729	106,271
慶弔費	150,000	81,541	68,459
会報印刷費	900,000	813,645	86,355
会議費	1,900,000	1,328,306	571,694
卒業生記念品費	300,000	278,775	21,225
補助費	1,300,000	1,161,365	138,635
退職積立金	100,000	100,000	0
諸費	287,000	286,122	878
予備費	20,000	0	20,000
当期支出合計	8,447,000	7,326,184	1,120,816
当期収支差額	△2,286,000	△261,461	△2,024,539
次期繰越金	0	2,025,336	△2,025,336
合計	8,447,000	9,351,520	△904,520

平成 17 年度青山同窓会収支予算書

自 平成 17 年 4 月 1 日
至 平成 18 年 3 月 31 日 (単位 円)

科 目	本年度予算額	前年度予算額	増 減
I 収入の部			
繰越金	2,025,336	2,286,000	△260,664
入会金	860,000	860,000	0
会費	5,300,000	5,300,000	0
雑収入	1,000	1,000	0
収入合計	6,161,000	6,161,000	0
合計	8,186,336	8,447,000	△260,664

II 支出の部			
人件費	1,140,000	1,140,000	0
通信費	1,800,000	1,800,000	0
印刷費	500,000	550,000	△50,000
慶弔費	150,000	150,000	0
会報印刷費	900,000	900,000	0
会議費	1,190,000	1,900,000	△710,000
卒業生記念品費	300,000	300,000	0
補助費	1,300,000	1,300,000	0
退職積立金	100,000	100,000	0
諸費	300,000	287,000	13,000
予備費	506,336	20,000	486,336
合計	8,186,336	8,447,000	△260,664

平成 17 年 4 月 22 日

上記の通り相違ないことを確認致します

監事 江口 良介
監事 渡辺 国夫

中 林 昭 裕 成 林 二 郎 野 田 昌 隆 生 崎 秀 史 松 浦 隆 史 松 沢 祐 一 真 谷 誠 一 宮 島 敏 樹 山 本 剛 史 渡 辺 健 史 渡 辺 宣 昭 83 回 S 50 年 浅 間 芳 朗 天 野 謙 一 伊 藤 恵 子 今 井 秀 雄 植 津 雅 之 遠 藤 光 潔 萩 莊 則 幸 奥 間 美 佐 風 岡 磨 理 河 原 貢 司 下 田 康 司 窪 下 久 夫 熊 木 みや子	佐 藤 正 一 藤 崎 克 一 高 橋 慶 一 高 橋 慎 一 玉 木 裕 二 塚 本 健 二 富 山 武 美 中 村 雅 博 仲 村 昌 子 長 澤 恵 依 西 多 見 俊 原 謙 太郎 藤 崎 直 美 古 川 靖 之 本 前 川 倫 水 原 章 貴 森 平 淳 彦 山 作 房 彦 山 澤 進 篤 吉 田 桂 治 吉 田 徳 教 吉 若 杉 忍	渡 辺 友 昭 84 回 S 51 年 朝 倉 仁 樹 荒 川 朋 一 五十嵐 英 一 石 崎 悦 郎 今 井 康 晴 大 須 賀 子 小 野 兼 義 加 藤 雅 一 黒 川 隆 男 桑 原 正 史 小 林 芳 明 近 藤 公 男 近 藤 秀 治 郷 扶 二 子 斎 藤 敬 子 鈴 橋 建 造 高 橋 裕 之 高 山 有 子 田 崎 和 郎 畠 野 達 郎 丸 山 正 行 宮 崎 清 也 村 上 誠 夫 森 岡 哲 充 行 田	芳 川 敦 子 85 回 S 52 年 雨 若 慶 一 岩 崎 龍 一 大 沼 文 男 奥 村 基 雄 笠 原 哲 志 佐 藤 隆 司 佐 藤 や 一 白 井 晃 一 高 須 洋 久 高 野 裕 覚 高 橋 一 彦 竹 内 敦 夫 戸 枝 秋 夫 遠 山 知 良 長 谷 川 亮 子 星 山 松 太 郎 堀 川 正 幸 宮 村 一 明 宮 村 山 毅 渡 辺 彩 子 86 回 S 53 年 阿 部 二 郎 阿 保 聖 子	五十嵐 実 一 伊 藤 健 一 稲 月 秀 原 岡 田 修 司 小 野 島 恵 次 河 合 慎 次 小 倉 妙 子 白 倉 正 孝 瀬 谷 信 一 高 野 千 津 子 高 橋 聡 利 高 橋 雅 哲 田 中 照 夫 田 辺 慶 直 玉 木 俊 広 坪 野 俊 広 中 川 佳 代 子 中 川 均 洋 林 光 重 三 宮 腰 重 三 吉 崎 芳 明 渡 辺 彩 子 87 回 S 54 年 五十嵐 昌 子	石 川 裕 之 井 上 博 一 今 西 博 一 大 久 保 総 一 大 野 直 子 大 森 克 利 萩 莊 克 彦 奥 村 克 彦 押 木 和 宏 加 藤 真 理 子 清水 忠 明 白 柏 基 宏 Saltzgeber 純 子 土 屋 真 規 土 屋 恭 弘 藤 本 健 介 藤 本 多 剛 松 本 俊 輔 88 回 S 55 年 五十嵐 修 一 池 田 全 之 石 原 基 規 江 波 恒 夫 岸 亮 子 君 彰 伸 一 木 村 裕 毅 草 間 博 子 小 竹	小 湊 知 見 洪 谷 榮 晴 白 井 崇 一 鈴木 郁 之 常 木 望 小 坪 井 小 夜 子 南 場 充 子 長 谷 川 章 司 長 谷 川 健 裕 藤 木 一 浩 本 間 公 義 三 本 明 明 峰 村 信 巖 宗 村 信 巖 吉 田 渡 治 渡 辺 徳 昭 89 回 S 56 年 相 場 恵 美 子 池 信 平 一 石 栗 健 一 市 原 綾 子 今 井 あ かね 倉 田 裕 治 桑 名 雅 謙 通 所 直 樹	山 上 浩 志 吉 井 雅 典 90 回 S 57 年 五百川 浩 淳 岩 谷 道 明 斎 藤 恭 彦 坂 田 文 彦 白 須 洋 二 隅 山 敏 明 袖 田 文 亨 土 屋 栄 子 富 山 恭 子 村 上 肇 栄 渡 上 栄 91 回 S 58 年 市 川 健 敬 梶 谷 敬 子 本 間 正 隆 横 堀 真 弓 今 井 由 美 子 小 野 島 あ ゆ 志 河 内 康 志 北 尾 彰 朗 92 回 S 59 年 倉 田 裕 治 桑 名 雅 謙 小 澤 謙 一 93 回 S 60 年 小 澤 謙 一 94 回 S 61 年	花 村 竜 司 樋 口 聡 郎 95 回 S 62 年 浅 岡 俊 宏 中 村 有 里 町 田 一 越 96 回 S 63 年 入 田 康 夫 鈴木 周 周 99 回 H 3 年 西 山 浩 美 吉 澤 い と な 101 回 H 5 年 今 井 慶 貴 打 越 輝 昌 小 川 和 恵 鈴木 由 貴 子 103 回 H 7 年 伊 藤 永 朗 105 回 H 9 年 川 合 健 太 郎 渡 辺 淳 也 107 回 H 11 年 宮 島 望
---	---	---	---	--	--	---	--	--

[illegible]

[illegible]

24年	進行坦松廣進
政勇	克昇好
25年	廣行
成末莊	義哉平助
準之	治雄良郎
整照允	衛司
芳耕	克郎
勇忠	哉三
庫欣	策弘二
啓吉	忠勉
高榮	章男
善一	吉彦夫
正寅	信利
熙春	明俊
龍昭	祥茂
勝克	利松
正哲	良次
詩郷	茂洋
二夫	二郎
雄夫	男司
昭明	嗣教